



1987年に出版された『社会科＝一本のバナナから』（国土社）

Profile
おつ・かずこ
神戸市生まれ。兵庫県立高校教諭、北海道教育大学教授、附属札幌中学校校長、北海道教育大学理事・副学長、日本国際理解教育学会会長などを経て、現在は北海道教育大学名誉教授、北海道ユネスコ連絡協議会会長。2017年度のJICA理事長表彰国際協力感謝賞受賞。

ザンビアの子どもたちからダンスを習う学生たち



バナナからSDGsへ —私の歩んできた道

バナナとの出会い

1982年、高校の社会科で「現代社会」という新しい科目が始まりました。「現代の社会と人間に関する基本的な問題」を中心とした内容で、暗記ではなく思考力を育成するという、いわば戦後社会科の一大転換をもたらす改革でした。当時、高校で現代社会を教えることになった

私は、世界とのつながりについて考える授業をつくれないうものかと思いついて悩んでいました。そんなとき、フィリピン・ミンダナオ島のバナナ農園を題材に、多国籍企業の存在や労働者の貧困問題について論じた鶴見良行さんの著書『バナナと日本人―フィリピン農園と食卓のあいだ』が出版されたのです。授業に活用できるかもしれないと思い、すぐさまこの本に飛び付きました。授業づくりの過程で私自身がミンダナオ島を

訪れ、バナナ農園で働く人々から仕事の内容や労働条件、農業被害などについて聞くことができたので、その情報をもとに授業の構成を考えました。授業では、自分たちが食べているバナナは誰の手でどのように作られているのか、生産者はどんな暮らしをしているのか、なぜバナナは安いのかなどを伝え、「バナナを食べる私たちはどうするべきか」を生徒たち自身を考えてもらいました。教科書に書かれている「南北問題」

という言葉からではなく、身近なテーマから入ることで、生徒たちにとって世界とのつながりをより意識できる授業になったと思います。毎年この授業に改良を加えていき、1987年には『社会科Ⅱ 一本のバナナから』という1冊の本にまとめました。

しかし、やがてこのスタイルの授業だけでは不十分だと気付きました。生徒たちはスーパーでバナナのことを調べたり、バナナを食べるべきかどうかを議論したりしましたが、授業の前段階として現地に出掛けて調査し、さまざまなデータや資料を集めたのは教師である私です。そのプロセスこそが面白く、授業はその成果でしかありません。もっと生徒自身がアクティブに学ぶ授業ができないかと考え始めました。

生徒が主体の授業をつくるために、私は海外で文献を集めたり授業を参観したりしました。貿易の疑似体験によって世界経済を考える「貿易ゲーム」を取り入れた授業や、ロールプレイ形式で立場の違いや多様性を学ぶ授業、死刑制度などのテーマを議論するディベートなどを実践したのはこの時期です。多様な学習活動を取り入れ、生徒たちが共感的な理解を伴いながら考えを深められる授業を目指しました。今では珍しくない学習活動ですが、20数年前は手探りでこれらの授業をつくっていました。

また、バナナの授業について報告会を行ったとき、ある出席者の方から「この授業こそ開発教育です」と言われました。当時、私は「開発教育」という言葉を知りませんでした。それ以来、海外の開発教育の歴史や実践についても学ぶようになったのです。

SDGsに教育から向き合う

やがて北海道教育大学に勤務するようになり、教育支援の調査研究を始めました。サブサハラ地域の初等教育就学率は、2000年時点で約60%と世界で最も低い水準でしたが、2015年には約82%と飛躍的に向上しています。就学率を高めるためにどのような取り組みをしているのかを明らかにするため、①女子教育推進政策（ザンビア）、②ノンフォーマル教育の取り組み（ザンビア、タンザニア、ウガンダ）、③へき地の教室建設と複式学級（エチオピア）の3つのテーマを軸に調査研究を行いました。この調査に



エチオピアでの調査研究に同行した北海道教育大学の学生たち。巨大な蟻塚の前で

は、何度か学生も連れて行きました。初めてバスポートを持って海外に行くという学生が少なくありませんでしたが、その後もNGOのスタディーツアーに参加したり、青年海外協力隊に参加したりと、パワフルな人材に育ちました。「万人のための教育（Education for All: EFA）」の取り組みによって、確かにサブサハラ地域の就学率は飛躍的に向上しています。しかし、問題は、教育の質ににあります。調査によって、ある学校では子どもたちの約3分の2が授業を理解しているとはいえない状況だと分かりました。2015年に国連で採択された持続可能な開発目標（SDGs）で、全ての人に質の高い教育を提供するという目標が掲げられたように、これはサブサハラ地域だけでなく世界全体の課題でもあるのです。

ところが、SDGsは日本の学校現場にはまだ広く知られていません。そこで、北海道内で開発教育・国際理解教育に関心を持つ市民や教員でつくる「北海道開発教育ネットワーク（Development）」では、今年度、JICAの支援事業を活用した「SDGsを目指すESD授業実践力向上プロジェクト」を開始しました。ESDとは持続可能な社会づくりの担い手を育む教育のことで、このプロジェクトでは、海外でのフィールドワークをもとにSDGsのいくつかの項目をテーマとした教材を開発し、道内各地の学校で出前授業や研修を行っています。私はDevelopmentのスーパーバイザーとして、これまでの授業実践や調査研究の経験を生かしながら、先生たちの授業づくりや実践を支援していきたいと考えています。

※「Voice」の内容は、筆者の個人的見解に基づいています。